花喰鳥文刺繍裂

花喰鳥文刺繍裂

昭和五〇年、第一二八号辛櫃の染織品を展開整理中に発見したものである。台裂（だいぎれ）は白羅を表とし、その下に白絁と生絹ふうの白絁を重ね、この三枚を通して繍っている。背面は網目四菱文の平地綾文白綾を貼る。

繍法は平繍が主体で、一部の細い線は鎖繍。またおもな輪郭とくちばしは金糸、胸の飾りは金・銀糸を併用し、随所を別糸でおさえている。奈良時代の刺繍としては普通の技法であるが、図にみるように一〇色近い彩糸を各部それぞれ濃淡二、三段階に暈繝繍している技術はみごとで、とくに宝相華化した尾羽と複雑な花座の処理に緻密な腕の冴えが感じられる。正倉院の現存刺繍は、花樹孔雀文刺繍紫綾が比較的大形の優品として知られている以外は小品が多いのであるが、この刺繍は鳥の丈（たけ）が四〇センチ、台裂は現存部分の竪八〇センチ、巾六三センチもあって、それでもまだ周囲が欠けている。またこれと一緒に同類刺繍の小片が無数に発見されたことなどからみても、当初はさらに大型で花樹孔雀文刺繍紫綾をしのぐ複雑な構図だったにちがいない。花座上に見返り鳥を配するという、八世紀の日唐絵画・工芸に頻用されたこの種の図様は、正倉院宝物中にも少なくないが、これほど豪華なものは例がない。

用途は明らかでないが、図の左方に台裂の継目があるから、竪長の裂を幾巾か横につないだ帳（とばり）の類ではなかっただろうか。

（松本包夫）

夾纈羅幡（上半部分）

夾纈羅幡（上半部分）

昭和五二年度、第一二九号辛櫃中の展開整理品である。三坪四脚の幡で、頭・身・脚すべて夾纈羅製。頭部は両面あわせだが、身・脚はひとえである。頭部の縁は紫地夾纈羅に黄土色で花喰鳥と草花を描き、身の左右縁は黒紫羅に波行唐草が、上下縁は紫綺に雲形が、やはり同じ色で描かれている。坪境は無地の紫綺である。なお過去に発見した同類の幡によると、頭部にも黄土色彩絵黒紫羅製の吊紐兼用の舌がついていた。

ところでこの幡の夾纈をみると、花弁や葉の随所に濃淡二色が暈繝調に重なっている部分がある。この染め方は明確ではないが、いま推定されている夾纈技法からすれば、版型をとりかえて二回染めしたもののようである。夾纈は普通、技術上の理由から文様の周囲に白い輪郭線が生じ、文様の重厚さが弱められる。本図の夾纈は、そのような欠点を解消するとともに当時流行の暈繝調を加味しようという狙いをもっていたのではないかと思われる。しかしこのような二回染めは、正倉院の多数の夾纈遺品中でも比較的少なく、手間が煩瑣なためかあまり量産されなかったらしい。

ちなみにこれと同形式の幡は過去に二旒が発見されただけで、正倉院に伝わる大小各種の幡のうちではきわめて少数である。そしてそのどれもが本図のように非常に鮮やかな染色と完好な形を保っている。使用の時期のわからないのが残念だが、二回染めの夾纈を使ったり彩絵を施したりと製作に手間をかけていること、遺品が少なく保存がよいことなどから推して、東大寺の多くの幡のなかでも、かなり貴重視されていたものではなかったかと思われる。

身巾二八・〇センチ　全長二九四・三センチ

（松本包夫）